

タープを活用した教育活動の意義

Significance of Educational Outdoor Activities Using Tarp

藤田 良治¹⁾， 湯浅 万紀子²⁾， 藤田 貢崇³⁾

1) 愛知淑徳大学創造表現学部 2) 北海道大学総合博物館 3) 法政大学経済学部

Yoshiharu FUJITA, Makiko YUASA, Mitsutaka FUJITA

キーワード：アウトドアミーティング、展示解説、コミュニケーション能力

1. はじめに

スウェーデンの就学前教育の場では北欧少数民族のタープが園庭にあり、その中で子どもたちがたき火を囲んで教師の話を聞く時間がある。タープやテントは幕体とポール、ロープを組み合わせて屋外で設営する。キャンプで使用する場合には幕体を天井や壁に張り居間（リビング）の役割を持たせる、テントは天井や壁に加え床部分へも幕体を張った空間を作り寝室（ベッドルーム）として使用される。

スウェーデンの幼児教育が準拠している就学前教育・保育要領（プレスクール・カリキュラム：Läroplan för förskolan - Lpfö 9）には子どもたちへ民主主義の理解、民主主義に則った自己実現、他者の尊重、民主主義の実現のため、そして民主主義社会の一員として子どもたちも責任を担うことを学ぶと説明されている。つまり、テントやタープ内のミーティングは単なるレクリエーションではなく、対話を習慣化して意見の一致を図る合意形成を自然と身につける教育の一環であることが伺える。

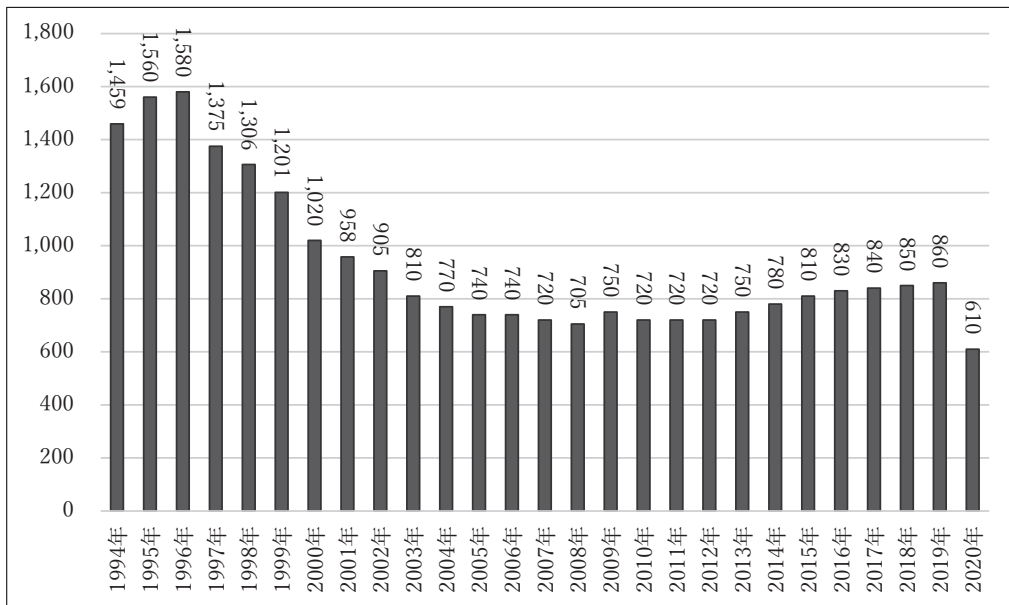
近年アウトドアに関わる人口やアウトドアグッズの売り上げは伸び、ブームとなっている。しかし、2020年以降は新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の拡大が見られ、一時的にアウトドア人口が減少した。それでも、他の観光業界に比べ減少率は少なく、余暇を過ごすレジャーとして定着してきたと言える。世代別に分析すると大学生を含む若い世代はアウトドアに対して強い関心を示している。しかし、キャンプ等のアウトドアに関心はあるものの、誰しもが屋外で雨や風を遮る布製のテントやタープを立てた経験があるわけではない。それらを手軽に始める機会が少ないためと考えられる。テントとタープは屋外で日焼けや熱中症となる強い太陽光や雨露、風を遮り居住性を確保する。アウトドアを野外学習や森林環境学習など教育的な観点で論じられることは多いが、本論は、筆者らが実施してきた高等教育におけるタープを活用した事例を紹介し、これらの事例が持つ社会において不可欠なコミュニケーション能力や協調を涵養する教育としての可能性を論じる。まず、アウトドアがブームと言われる統計データを示し、新型コロナウイルス感染拡大前後の動向と年代毎の潜在需要を分析する。次に、これまでタープを活用した教

育活動を数多く行ってきた愛知淑徳大学創造表現学部の藤田ゼミナールと北海道大学総合博物館（札幌市 以下、総合博物館とする）でタープに類する大型シェードを活用した札幌の企画展示と小笠原の巡回展示の事例を紹介する。屋外におけるタープを活用した教育活動が学生や市民の間で円滑なコミュニケーションにどのように貢献できたかを示す。藤田ゼミナールの事例では、タープを設営する過程や設営後のタープ内におけるミーティングが参加者にどのような影響を与えたか聴き取りを行っており、これによりコミュニケーション能力や協調性の向上に関する効果を検証した。また、新型コロナウイルス感染拡大前後でアウトドアミーティングの位置づけがどう変化したか考察する。総合博物館の企画展示でタープを活用した札幌での事例では、学生は学芸員養成課程とは異なる全人教育を目指す博物館独自の教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」の一環として展示解説に取り組んだ。藤田と湯浅から事前に展示内容と展示手法について指導を受けて展示解説に臨んだ。来館者への聞き取り調査の他、毎回の実践のあとに学生から湯浅に提出されたミニレポートと湯浅からのフィードバック、藤田と湯浅の参与観察の結果から、この実践の意義を検討する。小笠原でのタープを活用した展示においては事前に展示内容と市民への応対について藤田が指導し、実践の後に学生達に展示解説による気づきに関する聞き取り調査を行った。その分析結果を示す。

2. アウトドア人口の推移

アウトドアに参加する人の動向について分析する。表1は、オートキャンプの人口推移を示しており、『オートキャンプ白書』によると、オートキャンプの人口推移は1996年にピークを迎え、2000年前半まで衰退期にあった。その後、2019年まで人口は増え続けた。しかし、2020年4月に新型コロナウイルス蔓延により緊急事態宣言が発令されたことにより、国内の多くのキャンプ場は閉鎖され、営業したとしてもテントサイト数を減らしたキャンプ場もあり、オートキャンプ人口は激減したと考えられる。2021年のオートキャンプの人口は算出されていないが、第2回（2021年1月8日～3月21日）、第3回（2021年4月25日～9月30日）と続く緊急事態宣言により、2019年同様低い数字となることが予想される。観光庁の発表した2020年の旅行・観光消費動向調査によると、2020年の日本人国内延べ旅行者数は2億9,341万人（前年比50.0%減）、うち宿泊旅行が1億6,070万人（前年比48.4%減）、日帰り旅行が1億3,271万人（前年比51.8%減）であった。これに比べ、オートキャンプの人口は860万人から610万人へと2020年前年比で約30%減である。オートキャンプの人口は減ったが、通気性の良い屋外でのレジャーとして再び注目が集まったという見方もあり、国内旅行と比べると影響は少ないと見ることができる。

表 1. オートキャンプ参加人口の推移 人口（万人）



1990年代中頃のアウトドアブームに続き、1990年後半は第2次アウトドアブームと呼ばれる動きがあった。『レジャー白書 2021』では、将来の「希望率」と現在の「参加率」の差を希望はあるがまだ実現していない需要の大きさを「潜在需要」と定義して統計を取っている。（調査対象：全国 15 から 79 歳男女、有効回答数：3,246、調査方法：インターネット調査、調査時期：2021 年 1 月から 2 月）。

表 2 のオートキャンプの潜在需要順位は、全体、男女とも 2018 年はトップ 10 圏外だったが、2019 年は全体 8 位、2020 年は全体 10 位でトップ 10 入りしている。年代別では、新型コロナウイルスの影響で巣ごもり化傾向が強くなった 2020 年は男性 20 代～50 代でトップ 10 に、女性 10 代と 40 代がトップ 10 入りを果たしており、幅広い年代でキャンプに対する潜在需要の広がりが見られる。

表 2. オートキャンプの潜在需要順位

		2019	2020
全体		8	10
男性	全世代	6	9
	10 代	6	10 位圏外
	20 代	2	8
	30 代	3	5
	40 代	6	9
	50 代	7	7
	60 代	9	10 位圏外
女性	全世代	10 位圏外	10 位圏外
	10 代	10 位圏外	10
	20 代	10 位圏外	10 位圏外
	30 代	10 位圏外	10 位圏外
	40 代	10 位圏外	10
	50 代	10 位圏外	10 位圏外
	60 代	10 位圏外	10 位圏外

3. タープを活用した教育活動の取り組み

3.1. 授業における活用事例

愛知淑徳大学創造表現学部藤田ゼミナールの教育目標の一つにコミュニケーション能力を身につけることを掲げている。学生はゼミナールを通して、お互いを尊重し理解し合うことを学ぶ。グループワークとして映像制作を行い、コミュニケーションを学ぶために屋内外で教育活動の一環としてレクリエーションも実施する。タープを活用したゼミナールは、全15回ある授業の2回目から4回目の間に行い、天候が適した日に学内で設営するようにした。学生が顔を合わせる初期段階に実施することで、設営撤収作業で協調性や、その後のコミュニケーション能力向上に効果が表れることを期待した。タープを活用したゼミナールを実施することは、授業1回目のガイダンスで説明し学生全員の同意を得ている。タープ内で話し合ったテーマは、「藤田ゼミナールのメンバーで今期自主的に取り組んでみたいこと」であった。屋外という開放的な空間で進行役の学生が、それぞれの考えを聞き出しまとめていった。ゼミナールは教員が学生の個性と自主性を優先したいと考え、教員はほとんど口を挟むことなく、必要な時のみサポートする姿勢をとった。ゼミナールの運営は学生発案で計画を立て、実行する。計画通りに進まなくなったとしても、途中で止めてしまうことも許される。完成させることよりも、自由な創造力と発想力、計画の思案や仲間との合意形成、実行に移すためのスケジュールなどの企画力に重きを置いている。高い目標よりも身の丈に合った計画を立てて欲しいと願い、学生が主体的な立場でゼミナールに参加できるようにサポートしている。

ゼミナールでタープを活用した教育活動はこれまでに以下の2018年から2021年まで5件、8日間を実施した。各回で使用したスノーピーク製のタープは、サイズ縦885×横510×高210cmで、市販されているタープとしては大型の部類に入る(図1)。長さ210cmある2本のポールを使用しており大人が立って入れる程度の内部空間が確保されている。タープ使用時は、通気性や開放感を得るため入り口2カ所を最大240cmまで開放的に跳ね上げた。生地を通す光を軽減するシールド加工された幕体を使用しており強い日差しから来る熱量を軽減する。

タープを活用したゼミナールに参加した学生は延べ66名である。なお、2020年度は新型コロナウイルスのため緊急事態宣言などのためオンデマンドによるゼミナールの実施が推奨された。このため、タープを活用したゼミナールは実施されなかった。

① 実施日：2018年10月3日

対象者：2018年度後期のメディアプロデュース基礎演習a 受講生学部1年生20名

② 実施日：2019年4月24日、5月8日 2日間実施

メディアプロデュース基礎演習b 受講生学部2年生12名

③ 実施日：2019年10月2日、10月9日 2日間実施

2019年度前期メディアプロデュース基礎演習a 受講生学部2年生12名

④ 実施日：2021年4月21日、4月28日 2日間実施

2021年度前期演習I a 受講生学部3年生9名

⑤ 実施日：2021年4月21日

2021年度前期演習II a 受講生学部4年生13名



図 1. 愛知淑徳大学はッピー広場におけるアウトドアミーティングの様子



図 2. 受講生によるタープ設営風景

ゼミナールでは各回とも担当教員の指導の下、資材の運搬、設営から撤収まで以下の作業を学生が行った（図2）。設営後はタープ内に椅子を持ち込み車座になり、アウトドアミーティングと呼ばれるゼミナールを実施した。タープは愛知淑徳大学長久手キャンパスはっぴー広場に設営した。この広場は天然の芝が敷かれておりペグを地面に刺すこともでき、タープを設営する条件が揃っている。しかし、参加した学生は日中の日差しや風向き、広場の緩い傾斜を読み取り、屋外ならではの自然環境下で設営するため仲間と協力しながら臨機応変に対応しなければならない。

設営作業

1. 資材の運搬
2. 天候や風向きを確認
3. 設営場所の選定
4. 幕体を広げる
5. 出入り口の方向を確認
6. 幕体の内側にポールを設営
7. 幕体へペグダウン
8. ロープを張りペグダウン
9. タープ全体の張りを均等化

アウトドアミーティング

1. 車座になり自己紹介および、今期のゼミナール運営について話し合い

撤収作業

1. ペグ、ロープ、ポールの取り外し
2. 幕体畳み
3. 資材を袋へ収納

から構成されている。

3.2. 博物館企画展示への導入事例

博物館での展示は室内で行うことが多いが、総合博物館で行った企画展「学船 洋上のキャンパスおしよろ丸」（2014）は、屋外タープに類するコールマン製パーティーシェード 360（設営サイズ：縦 360 × 横 360 × 高 218cm）を活用した。企画展示の一部として総合博物館正面の屋外展示（図3）を行った事例を示す。この企画展示は、北海道大学水産学部が所有する練習船「おしよろ丸」が2014年度にIV世からV世へ代替わりに合わせて開催され、本論の著者である藤田と湯浅が主担当として関わった。企画展示は、総合博物館の屋内企画展示室で開催されたが、晴れた週末には歴史、教育、研究、仕事をテーマとした解説パネルとそれらのテーマを象徴する写

真をレイアウトしたパネル2枚1組にして、総合博物館入り口前に設営したタープ内で展示した。タープは4本の脚で自立し、側面4カ所に幕壁を取り付けることができる。風が強い中、パネルをタープ内に設置する時は、この幕壁を利用してA0サイズのパネルを設置した。タープ内では、企画展示室と同様に、北海道大学の学生が展示解説を行った。展示室とタープ内での解説は、合計4時間8回である。事前に藤田から展示内容の説明を受け、湯浅から展示に関する留意事項と来館者への対応手法の説明を受けた。

タープ内での展示には2つの目的があった。すなわち、来館者が博物館に入る前に企画展に関心を喚起し、企画展示室への誘導をすること、そして学生が来館者と交流して大学博物館の企画展示の導入の鍵となる重要な役割を担い、展示解説の中で自分達の役割を意識しながら来館者対応と質疑応答することで臨機応変な対応とコミュニケーションスキルを磨くことである。

3. 3 展示のパッケージ化

札幌の事例でタープを活用した企画展示を一つのパッケージにして、練習船おしよる丸V世(1,598トン)が小笠原村二見港に寄港した2014年12月14日に巡回展示(図4、5)とオープンシップ(乗船ツアー)を行った。小笠原への航海は洋上実習を目的とし、北海道大学と日本大学、帝京科学大学の学生60名ほどが乗船した。乗船した学生から有志で巡回展示の解説員を募りタープを活用した巡回展示に参加した。寄港先での巡回展示は、練習船おしよる丸に乗船した学生が船上での研究や教育活動を改めて認識し、説明できるようになる。寄港先で市民と交流、学生間の交流が生まれることを目的とした。

二見港のある父島には、およそ2,000人が住んでおり、おしよる丸が到着する3日前から島内の防災無線を通じて巡回展示が開催されることが告知された。また、おしよる丸着岸後は、街の中心にあるスーパーマーケットや飲食店へポスターの掲示を行った。巡回展示には、おしよる丸実習航海(2011年7月)中に実施していた目視調査でイカが水面から飛び出して着水するまでの一連の行動の連続撮影に成功したことが当時話題となり、その飛行行動を解説したパネルがパッケージに追加して展示された。乗船ツアーでは、巡回展示のスタッフが来場者を案内し、実際に教育研究がされている現場を見学した。また、おしよる丸船内の大型モニターに総合博物館の企画展示室で上映された藤田制作の映像コンテンツを映し出した。おしよる丸V世は、企画展示最大の実物展示と言える。荒天により12月13日に予定していた出航を一日早めることとなり、巡回展示終了1時間後には二見港を後にしたため、乗船ツアーの参加者は出港準備を行う乗組員の姿を間近で見学した。



図 3. 北海道大学総合博物館正面入り口にタープを設営し、展示の導入とした。
このなかでも学生が展示解説・紹介を行った



図 4. 東京都小笠原村におけるタープ設営の様子



図 5. 東京都小笠原村二見港における企画展示「学船 洋上のキャンパスおしよ丸」の巡回展示の様子 展示解説員が市民を出迎えおしよ丸の歴史や小笠原まで航海してきた船内の様子を学生目線で説明し、奥に停泊するおしよ丸Ⅴ世の乗船ツアーに誘導した

4. 3 件の事例の意義に関する調査結果および考察

タープを活用した教育活動として上記 3 つの事例を示した。それぞれの事例について当初の目的が達成されたか、参加者や来館者への聞き取り調査や参与観察を実施した。

4.1. 藤田ゼミナールにおける評価

キャンプの経験のない学生の参加が目立った。キャンプの経験があるとしても家族や友人に連れて行ってもらい、参加者の 9 割は設営の経験はほぼなかった。未経験の学生が多いにもかかわらず、協働してタープを設営した。学生に感想を聞き取ったところ「アウトドアミーティングが実施されなければ、教室で自分から話しかけることは難しかった」、「アウトドアミーティングの開放的な雰囲気の中で気楽に話ができた」、「仲間と工夫しながらロープを張った」、「ゼミの仲間と車座になって話し合ったことで、仲良くなるきっかけができた」と回答し、コミュニケーションや協調性に関するコメントが得られた。新型コロナウイルス感染症の拡大によりオンライン授業で友達を作れなかった期間もあり、対面コミュニケーションによる対話は良い機会になった。アウトドアミーティングは学生間でコミュニケーションをとるきっかけとなり、自主性と協調性が生まれたと言えよう。教員も学生も、教室で行われるゼミナールとは異なった一面を見せるこ

とにより、開放的な空間で参加者それぞれの多面性を知ることができたと考えられる。他に「異なるゼミナールに所属する友人にアウトドアミーティングの感想を話した」、「年間を通した授業で一番記憶に残っている」というコメントも得ることができた。3. 1 で述べたゼミ運営の目的が達成されたと言えよう。

2021 年度前期演習 I a 学部 3 年生 9 名に対してアウトドアミーティング実施半年後に「もう一度アウトドアミーティングを実施したいか」と質問したところ、全員が「実施したい」と回答した。アウトドアミーティングが良い印象を持ち、高い満足度が得られたと言える。2021 年のゼミナールに参加した一人は、「夏休みに友人 3 人とキャンプに行き、テントの設営時にペグの打ち方は役に立った」と回答した。タープの設営が技術的な知識として役立ったケースと考えられる。タープの設営で始めてペグ打ちを行った学生は、「キャンプに行きたい気持ちが更に強くなった」、「テントの選び方がわかった」、「テントが欲しくなった」とコメントしており、前述したゼミ運営の教育目標の達成という観点以外にも、テントの活用に関する高い潜在需要を喚起させるきっかけとなった。アウトドアグッズは被災時にも活用できる。テントやタープの設営などを災害時に適切に行うためには、日頃から使い慣れておく必要がある。参加者からもこの点を指摘した声が聞かれ、防災意識の高さが伺える。幕体とポール、ロープを組み合わせで設営するテントやタープは持ち運びが容易で少ない人数で設営ができる。日差しや風から身を守ることができ、プライバシーの確保が可能である。アウトドアの知識や技術は、被災時を生き抜く術と言える。防災教育に関する先行研究では、普段の生活に活かすことができるアウトドア学習をしながら、いざという時のための防災教育になる（水谷，2015）と述べており、アウトドア教育が被災時に身を守る術として重要性を説いている。

4.2. 博物館企画展示 札幌の事例評価

企画展示期間中、博物館正面に設営したタープは来館者の注目を集めた。タープに訪れた来館者は学生から企画展示の説明を受けた。これが企画展示の導入になったことは、その後の館内の展示室での来館者からの聞き取り調査で、大半の来館者がタープでの学生の説明を受け、企画展示を見る動機が高まったと回答していることから明らかとなった。一方、展示解説を担当した学生から毎回解説後に提出されたミニレポートでは、初対面の来館者に声をかけて解説する難しさや、各自が工夫を重ねた解説方法が綴られた。特に、来館者に一方的に説明するのではなく、来館者から質問や意見・感想を引き出しながら対話する重要性に気づく様子が明らかであった。藤田と湯浅が行った展示解説場面の参与観察においては、解説経験を重ねて教員からのレポートへのフィードバックを受けて、その次の展示解説では更に意欲的に臨機応変に解説する様子が見受けられた。そして最終考察レポートでは、「人同士が関わる機会が大変多いことに気がついた」、「多くの方に直接対応でき、有意義な時間を過ごすことができた」というコミュニケーションに関する気づきやスキル向上についてのコメントが得られた（湯浅・藤田，2018）。3.2 で述べた 2 つの目的が達成されたと言えよう。

4.3. 博物館巡回展示 小笠原村の事例評価

小笠原の事例では、大学が持つ練習船内の教育や研究を寄港先で展示することにより、市民との交流が数多く生まれた。小笠原村における巡回展示は北海道大学の学生やおしよ丸の船員がタープの設営や企画展示の解説を担った。巡回展示には放送を聞いて来た親子連れや小学生のグループ、当日は選挙の日程と重なったため選挙の行き帰りに立ち寄る市民など約 100 人の来場があった。展示解説に参加した学生へ感想を聞き取ったところ「小笠原の市民が北海道大学の練習船にこれほど興味を示してくれたことに驚いた」、「おしよ丸の寄港先で練習船について解説することは新鮮な体験であった」、「市民と言葉を交わすことは大切だと感じた」と回答している。展示パネルの写真に本人が写っていた学生は、小笠原への実習航海 2 度目の参加という事もあり、練習船でどのような教育がされ、生活しているか、実体験をもとにした解説には説得力があった。学生の展示解説を聞いたある市民から、「北海道大学が船を持っていることをはじめて知った」、「毎年、おしよ丸がこの時期に入港することは知っているが、何をしているのか展示を見て理解した」、「船は、新築のにおいがした」という声が寄せられ、父島在住の北海道大学水産学部 OB から、「おしよ丸 IV 世よりも、V 世はモニター類が大きくなるなど教育研究設備が充実した」というコメントがあった。寄港先における巡回展示の展示解説を通してコミュニケーションの輪が広がったと言える。親しみを持って接してくれた市民と展示を手伝った北海道大学、日本大学、帝京科学大学の異なる大学間の学生にも新たな交流が生まれた。タープが来館者の注目を集めるだけでなく、タープ内で市民と展示解説を行う学生の間に交流が生まれコミュニケーションの場を創造することができた。3. 3 で述べた目的が達成されたと言える。

5. まとめ

本論では、タープをアウトドアミーティングや博物館展示に活用することで、学生や市民の間で円滑なコミュニケーションを活性化させる事例を示した。タープを活用した授業では、テントやタープの設営技術を学ぶだけでなく、臨機応変な対応や協調性、コミュニケーション能力を育んだ。ゼミナールでは、教室から屋外へ環境を変えることで、非日常的な空間を創りだし新たな発見を生み出した。新型コロナウイルス感染拡大により対面での授業が激減した。この弊害として、学生から友人が作れないと言う声を聞く。教育活動の一環として行ったアウトドアミーティングは他者を受け入れつつ、自分の考えや気持ちを相手に直接伝えられるコミュニケーション能力を磨ききっかけとなった。その後のゼミナール活動では他者を思いやる相互意識が高まり、団結力が増したと感じられる。タープを活用した博物館展示では、屋内における展示解説に比べ、お互いの距離感が近くなり、見知らぬ相手でもリラックスした雰囲気の中コミュニケーションが比較的とりやすくなったと考えられる。タープというツールを教育活動に持ち込むことで、学生の自主性や協調性が育まれ、人として必要なコミュニケーション能力を向上させる可能性を示唆した。

引用文献

- C. ブレイジ・西浦 和樹 (2018). 北欧スウェーデン発 科学する心を育てるアウトドア活動事例集 北大路書房
- 藤田良治 (2015). 「【12月14日】巡回展示「北海道大学がやってきた、学船 洋上のキャンパスおしよる丸」開催」. 北海道大学総合博物館企画展示, <https://www.museum.hokudai.ac.jp/display/special/7247/>, (参照 2021-10)
- 林綾子・堀松雅博 (2021). コロナ時代のアウトドアの楽しみ方 びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 18, 127-134
- 伊原久美子・富山浩三・小林博隆・徳田真彦 (2021). 体育学部キャンプ実習における大学生の自己開示の深さおよび実習に対する意識と体験の評価について 大阪体育大学紀要, 52, 7, 61-72
- 観光庁 (2021). 「旅行・観光消費動向調査 2020 年年間値 (確報)」. 国土交通省官公庁, <https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001402612.pdf>, (参照 2021-10)
- 粥川道子・山田亮 (2010). 高等教育機関における野外教育の試み (1) 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 1, 71-82
- 近藤剛 (2016). 大学における野外実習が参加学生の自然認識に及ぼす影響 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要, 73, 35-44
- 小谷正登・瀧和恵 (2012). 無人島キャンプ体験による自尊感情と自己意識の変容に関する研究 : 私立中学校の生徒を対象とした調査結果をもとに 人文論究, 63 (1), 149-166
- 水谷 好成・小野寺 泰子・鶴川 義弘・福井 恵子 (2015). 屋外体験型研修とものづくりを組み合わせた防災教育 教育復興支援センター紀要, 3, 107-115
- 森田清美・永吉宏英 (2000). 学生のアウトドアレジャー参加に関する研究 野外教育研究, 2, 29-37
- 日本生産性本部編集 (2020). レジャー白書 2021 余暇の現状市場の動向 日本生産性本部, 生産性出版
- 西田 博一・和田健・久野章仁・井上千鶴子・川村珠巨・久保雅裕 (2009). 宿泊オリエンテーション 15 年間のまとめ 大阪府立工業高等専門学校研究紀要, 2009, 43, 71-76
- 西野明・下永田修二・佐藤道雄・七澤朱音・杉山英人・小宮山伴与志・坂本拓弥 (2018). 学校教育における自然体験活動の実践力育成を目指した授業内容の検討 千葉大学教育学部研究紀要, 66 (2), 153-15
- 西浦和樹 (2016). アウトドア教育で科学するところを育てる—創造的問題解決による知識の活用を促す教授法とその実践— 日本創造学会論文誌, 20, 26-29
- 野口和行・吉田泰将・佐々木玲子・村山光義 (1999). 集中授業「アウトドアレクリエーション」における学生による授業評価—経年変化及び参加者が意識する効果について 体育研究所紀要, 38 (1), 67-74
- オートキャンプ白書2021—コロナ禍でキャンプ再発見— (2021). 一般社団法人日本オートキャ

ンプ協会

- 大森義彦 (1998). アウトドアレクリエーション・レジャーをめぐる問題点 高知大学学術研究報告, 47, 1-11
- セバスチャン ノウ・前田和司(2007). 場所のセンスとしてのアウトドア経験 年報いわみざわ, 初等教育・教師教育研究, 28, 49-59
- 高野美穂・木村博人・長谷川望 (2019). アウトドアキャンプ実習受講生における自己効力感の変容 東京家政大学研究紀要, 59 (1), 89-95
- 瀧靖之 (2018). アウトドア育脳のすすめ 脳科学者が教える！子どもを賢く育てるヒント, 山と溪谷社
- 辻直人 (2016). 長老教会宣教師ヘンリー・ボーベンカークの生涯ー日本での戦中戦後における活動を中心にー 明治学院大学キリスト教研究所紀要, 48, 291-308
- 梁川悦美・木村博人 (2004). レクリエーション・インストラクター養成課程におけるキャンプ実習の効果について 東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学, 44, 145-153
- 吉松梓 (2015). 「アウトドア」の授業が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響：授業アンケートとレポートの分析を中心として（竹中彌生教授 Martin A. Foulds 准教授 退職記念号） 駿河台大学教養文化研究所 駿河台大学論叢, 50, 143-157
- 湯浅万紀子・David Anderson・平井 康之・藤田 良治 (2018). 博物館情報学シリーズ 5 ミュージアム・コミュニケーションと教育活動, 樹村房
- 湯浅万紀子・藤田良治 (2018). 大学博物館における教育プログラムの意義と課題ー北海道大学ミュージアムマイスター認定コースを事例として 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要, 19, 43-50